

金山北方の山背上の1細谷は、予想どおり、断層で下流部が上り、上流側が埋積されていた。広くもないその埋積谷底が、如何にも日本らしく、水田化されていたことは、残存する畦畔で明らかだが、それも今は放棄されて、草茫々である。その、まだ萌えぬ枯草原の一隅に、こんな所にも住みつけた人があった名残か、紅梅が1本、こぼれるばかりに花をつけて、昼の光に静まり返っていた。私は丈の高い枯草を分けて行き、色も美しさも和菓子のような紅梅の花を近々と仰ぎ見、すぐろの流れの水を手で掬んで飲んで、この小天地のかつてのあるじも、こうして喉をうるおしたことがあったに違いない、と思った。

若くありたい

幸 田 清 喜

商売柄、「ききとり」に生涯をかけてきたので、私はいままで各地で各様の人々に広く逢ってきました。初対面でこのようなタイプの人らしいと一応見当をつけ、さてききとりが終ってから考えるとはじめの見当とちがっている場合が多い。カンがにぶいせいか、私の場合最初の印象なるものがどうもあてにならない。大体において愛想のよい人は誠意が足らず、面貌の怪異に似ず心があたたかいといった人が多いように思えて、造化の妙に敬意を表したくなります。いんぎん無礼というのがどうも一番扱いにくい。ブッキラポーにポツリポツリ話し出し、その話に内容があり、味があるといった人に出逢うと楽しくなる。はじめはばっていたのが後にかぶとをぬぐと、こちらの方が戸惑うことがあります。

北陸絹業地帯を歩きまわっていたときでした。組合の事務室で統計をうつしとっていると、係の方がこの町に立志伝中の機屋さんがいていま組合長をしており、小学校四年しかでないが偉い人だ。是非あってほしいということで、仕事半ばに奥まった畳の間でおあいした。なるほど年は60才位、端正な姿で理路整然と当地機業の推移と現況を説かれる。こういう人は一体いつどこでこれだけ勉強されるのだろうかと驚くほかはありませんでした。そういばった風にもみえないが、自信は満々のようにでした。さて説き去り説き来ったところで、今の若い者は……と例のセリフが出てきました。私はすかさず「あなたも年をとりましたね」というと、「まだ若いつもりだ。どうして老人か」と、そこで私「あなたはおとうさんからいつもこれを言われ、老人何をかいうと反感さえ持ったと先程言われた。にも不拘、駄目だ駄目だといわれたあなたは立志伝中の人、今おとうさんと同じ事を言う。御若いつもりでも実は老人。」と言うと、この人は突然襟を正し坐り直して私の前に深々と頭をさげ、「教えを忝じけなく思う。以後このことは絶対口にすまい。いつまでも若くありたい。」と。私は目のやり場に困りました。この姿にこそ立志伝中をみつけた思いですがすがしく、そして

かくいう私もまた以後これを言うまいと心ひそかに誓いました。私とて若くありたい。

ブラジルで考えたこと

福 井 英 一 郎

昨年の12月から今年にかけて約2ヶ月間ブラジルを歩いて来た。調査の中心はアマゾンとともに最も開発のおくれている東北地方であったが、一方文化的にも経済的にも最も進んでいるリオデジャネイロからサンパウロにわたる一帯も見ることができたので、これで不十分ながらもこの国の全貌を捉え得たように思う。その間いろいろと興味深く感じた問題の中の一つを記して見たい。この東北地方は潜在的の資源や生産力はかなり豊富で、この国の発展にとって非常に重要な地域であるが、その開発には基本的の調査が不可欠であり、今回の旅行の目的もここにあったわけである。しかし現地を歩いて痛感したのは、かりに自然的障害をある程度改善しても、現在見られる社会構造や文化の段階が変わらない限りは将来の発展の可能性に多大の不安を抱かざるを得ないことであった。すなわち、ここでは土地の大部分を占有する少数の大地主と貧困と無知の大衆とから成り、この中間の階層がほとんど存在しない二元性の社会であり、未だに中世紀的段階から脱していないと言ってもよいであろう。それでこのままではいかに自然条件が改善されても産業は振わず、到底将来の繁栄は期待し得ないであろう。その中で第一に考えられるのが土地制度であるが、かりに日本の農地改革のようなことが実現したとしても、現在の教育程度では恐らく無意味であろうとの意見が現地でも有力であった。これは日本ではとても想像もできないほどで、ブラジル全体の文盲率がほぼ50%、東北地方では70%を越え、その奥地では90%以上のところさえあり、日本のように津々浦々にまで小学校があるのではなく、大体日本では高等学校が設けられている程度の町にやっと小学校があると考えればよいであろう。それで、ほとんどの人が文字を知らないだけでなく、彼等の世界は非常に狭い範囲に限られ、ほかに恵まれた豊かな生活があることを知らないために、社会に対する不満もなく、衣服は気候の関係から極めて簡単に足り、食物も極端に言えば何ら勞せずして手にはいるので、特別の努力や創意工夫を必要とせず、このために生活の向上や発展への意欲を生じないのである。これでは制度だけをいくら働きよい社会にしても効果は期待し得ないわけで、教育の普及と知識の向上こそが先決の問題であろう。ここですぐ頭に浮ぶのが日本で、敗戦によって決定的の打撃を受けてから僅か20年と少しを経たばかりの今日、世界の列強に伍して発展をつづけ、とくにその経済成長においては先進国をしのぐほどである。今度の旅行でもブラジルをはじめとするラテンアメリカ諸国への日本大企業の進出は誠に目を見はらせるものがあった。これは単に日本民族が勤勉で耐乏力に富んでいること以外に、戦後の国際情勢の急変や国防費が極めて